

やまなし自然首都圏構想研究会 第3回自然首都圏構想推進部会 議事録

日時：令和2年12月25日（金）10:30～12:00

場所：山梨県庁防災新館401会議室（テレビ会議）

◆出席者：長崎 幸太郎 山梨県知事

【座長】

東 博暢 （株）日本総合研究所 主席研究員

【顧問】

田坂 広志 多摩大学大学院名誉教授

【委員】※50音順

清水 喜彦 S M B C日興証券（株） 代表取締役会長

中村 成志 S O M P Oホールディングス（株）

シニアマーケット事業部 部長

野村 明弘 （株）東洋経済新報社 解説部長

藤沢 久美 シンクタンク・ソフィアバンク 代表

山崎 豪敏 （株）東洋経済新報社 常務取締役執行役員 編集局長

【ゲストスピーカー】

伊東 順二 東京藝術大学 社会連携センター 特任教授

【事務局】

リニア交通局長、リニア推進監、リニア交通局次長、

リニア未来創造・推進課長、知事政策補佐官、

知事政策局政策企画グループ政策参事、広聴広報グループ参与、

観光文化部文化振興・文化財課長

◆会議次第：1 開会

2 知事挨拶

3 議事

○ウィズ／ポスト・コロナにおける文化芸術について

4 閉会

[知事挨拶]

長崎知事

- ・大変暮れのお忙しいところ貴重なお時間をいただき、この第3回自然首都圏構想推進部会にご出席をいただき、誠にありがとうございます。
- ・本日は、東京芸術大学伊東先生にご参加をいただき、スピーチを頂いたうえで意見交換をさせていただければと思う。
- ・伊東先生は本県の史跡甲府場跡整備基本計画検討委員会にもご参加をいただいております、あわせて感謝申し上げます。
- ・現状コロナの第3波が続いており、山梨でも以前に比べると、感染者の方が大変多くなっているが、その中でも前進の動きを止めてはならないと考えている。そういった意味で、県としても、この推進部会での議論を大変重要視している。
- ・ぜひ委員の先生方には、本県の発展に向け、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます、私の始まりのご挨拶とさせていただきます。

[議事]

(事務局から資料の説明後、ゲストスピーカー講演)

[ゲストスピーカー講演]

伊東特任教授

(スライドを用いながら講演)

- ・伊東順二でございます。ご紹介いただきありがとうございます。
- ・今から短い間お話をさせていただきたいと思いますが、まず、コロナのことが大変重くのしかかってきている時代であり、やはりコロナのことは無視できません。
- ・私の研究室は今年のテーマとしてコロナ禍の草創期から、アートワクチンと題して事業を展開している。それはどういう意味かという、ワクチンは打つことが可能になり始めているが、その前に人間の心が打ちひしがれてしまう部分がある。私が手がけている東北の災害復興でも、私自身の幼い頃体験した長崎の諫早大水害でも、大災害時には人間の心が、やはりどうしても体より先に萎れてしまう。そういうものを救うという力が、医術もそうだが、芸術にはあるのではないかと考えている。
- ・社会のためにとということで考えれば、私がテーマとしている社会基盤としての芸術というのはまさにそこにあって、芸術が、例えば水道やガスのように社会基盤となることによって、感動というものが社会の中核に据わる。その感動というものが引き起こす社会、もしくは未来というものは、きっと前進的な社会になるはずだというふうに思っている。
- ・そしてそのアートワクチンというものが、芸術というものを幅広く皆さんのもとに届けることによって、何よりも芸術の効果である、心を正しい状態に向けていく、もしくは

前向きな状態に向けていく、そのような活動をしている。

- ・芸術とまちづくりということでスライドを作成した。スライドの数が多く、時間の都合により大分割愛させていただいたが、私が大好きな山梨県で、果物もワイン、武田信玄も好きであり、私も大変ご家族にもお世話になった平山郁夫さんの美術館もあるということで、熱が入り過ぎたということだとお許しいただければと思う。
- ・私はベネチアビエンナーレにおける日本政府館のコミッショナーを務めたり、ユネスコ本部で日本の文化の伝統であるお茶、茶の湯の革新の展覧会を開催したり、また、パリ日本文化会館のオープニングのコミッショナーを務めたり、ロックフェラー財団で、現代美術ともう一つのテーマにしている日本伝統の革新ということ、特に地方の工業産業の革新ということをテーマにして、その上に成り立っている茶の湯の革新について、ニューヨークやパリで展覧会を開催してきた。
- ・また新しいテクノロジーということも、その活動と相反せず、むしろそれを未来へ伸ばすものだということを取り組んでおり、文化庁メディア芸術祭企画展のプロデューサーとして、今にも続く企画を立ち上げてきた。
- ・地方との関わりで言えば、現在福岡県新県立美術館基本計画策定委員会の会長をしており、福岡県の新しい美術館の建て替えを進めているところ。また、富山ガラス美術館名誉館長、富山市政策参与としてコンパクトシティの創造に関わり、高岡市魅力発信アドバイザー、前橋市市政功労者など、様々な地方と関わりを持たせていただき、また今回は山梨県でも、甲府城郭というすばらしい環境の保存再生に関わらせていただいている。
- ・新しい取り組みとして、12月18日にリリースを出したところであるが、吉本興業ホールディングス会長の大崎さんと私の連名で、吉本興業ホールディングスとアートで日本と地球を面白くする会を設立した。今後の地方創生と国際交流、そしてデジタルネットワーク社会に対応した多様なコンテンツづくりを、吉本興業と手を結び、東京藝術大学という非常にアカデミックな芸術に関わっている組織とお笑いということで国民の日常生活の中におけるエンターテイメントに深く関わってらっしゃる吉本興業とで、これから地方のまちづくりにおいて、様々なコンテンツを地元の方と結んで提供していく活動を開始した。これは大学でも反対があったが、こういう時代であるので、いろんなところが結集して、国民や、地球のために、良いコンテンツを提供するということがアートの役割ではないかと思っている。
- ・そのような考えを私が持つのは、もともと私が先ほどご紹介にあったように、フランス政府給付留学生として、フランスに2回招聘されたことがある。1回目は留学生として、2回目は給付研究員として招聘され、フランスの行政に深く関わることになったが、特に当時はミッテラン政権で、地方分権政策が大胆に施行されるときであった。
- ・地方分権政策というと今では当たり前のように聞こえるが、当時の70年代80年代、また中央集権というものの権化のようなフランスにおいて、地方に経済や組織等を分権す

るだけでなく、特にここは強調したいところであるが、文化の地方分権ということ高声高く叫んで、地域にある多様なコンテンツと結んで、またそれが国の柱になるように、地方の文化活性化ということを取り組んだ時期であった。

- ・私も研究員としてその役を担い、例えば現在非常に大きな国際的事業になったアヴィニヨンの国際演劇祭等々を、フランス政府派遣員として取り組ませていただいた。そしてこれは研究員として企画して実行した、日本に対する文化発信政策として、哲学や音楽、美術という一つ一つの分野ではなく、文化というのはそれぞれが繋がって、一つのコミュニティから発信されるので、そういったフランスの現代芸術が現代文化というもので日本と新しい道を開こうということで、各分野の方々、総勢 60 人ぐらいを日本に派遣し、各地で講演をするということを企画した。まだ 20 代だったが副コミッショナーに任命され、それを日本ではセゾングループの堤清二さんに特に強力に後押ししていただき、実現に至った。
- ・そういったことで美術評論家といえども、フランスで文化政策に深く関わることができ、その一環として、日本で現在美術というものが実装されるのが非常に遅れていたことから、現在もある原美術館の立ち上げやスパイラル、原宿クエスト、渋谷シードホールなどの開設に早期に関わることができた。
- ・その後帰国し、欧米の先端技術を紹介する中で、非常に深く感じたのは、モノとコトの不備、もしくはアンバランスということ。日本においては伝統を守るという、その部分にも意識が薄いところがあるし、未来を見る点で言えば、現代美術、芸術の先端的なものというところの拠点が不足している。そこで活動ということも限られるわけだが、その中で当時、いろんな取り組みをされていた方々がおり、特に大事なものは、私も理事として参加していた、日本文化デザイン会議が継続して行われていたことである。
- ・東京以外の地域で行う、これは梅原猛さんが特に強調されていたところで、黒川紀章さん、高階秀聖さん、田中一光さん、草柳大蔵さんたちが中心となってやられたものであるが、これは 80 年代 90 年代に、東京化される地方の文化というものを何とかして阻止して、この日本の多様な文化、そして経済のあり方、このそれぞれの地域モデルというものが無視されないように、私たち自身が総勢 200 人ほどで、毎年様々な地域に行っていた。そこで地方の方々とディスカッションし、その地方の未来を語り合うというものだったが、そこで活動することによって非常に大きな影響を受けたのが地方創生の可能性ということで、私自身が前橋会議の議長をやっていたこともあり、前橋での実験をいろいろとさせていただいた。
- ・またもう一つは、地方の産業を支える工芸産業についてである。知事もハンコを支えることをだいぶ熱心にやっておられ、素晴らしいことだと思う。単純に未来というものが道具に置き換えられて、それだけで未来を見るようなことはするべきではない。未来というものは過去からの道筋の中に成り立つものなので、そのような貴重な意見の発信というのは、私は強力に支持していきたいと思っている。

- ・ ということも、私は茶の湯というものに帰国してから大変興味を持ち、故田中一光氏と、裏千家故伊住宗匠からの依頼で、茶美会というお茶の革新事業を行った。プロデューサーとして関わったこの茶美会は、茶の湯というものが世界的に見ても非常に大きな、多様性を育む文化運動としての資質を持ちながら、例えば形にこだわりすぎたり、道具にこだわりすぎたりして、未来性、今日性というものを失くしている。そこで、新しい道具、新しいやり方、そして過去の伝承ということをテーマに、様々な地方の工芸産業と結び、新しい茶の湯の運動を10年間続けて、最終的にはニューヨークやパリで大きなイベントを開催した。今でも国際茶道文化協会の理事をやらせていただいている。
- ・ 地方のものづくりと思想との出会い、伝統の解放、社会基盤としての工芸産業が日本に存在したということで、20世紀の現代芸術のあり方は、むしろその方向に向いている。日常とかけ離れるのではなく、20世紀の初期のバウハウスや、様々なデザイン活動を通して、大衆のための芸術、大衆に目を向ける、そして基盤化する芸術ということを意図している。
- ・ 江戸時代に行われた各藩での産業基盤としての芸術、工芸というものは、非常に現代的なあり方として、用の美という言葉にもあるが、貴重な例である。建築における工芸というものが世界遺産に認定されたが、それについて、日本人はもっと早く気づくべきであったと考えている。
- ・ 地方創生の具体化の実験の前提として、90年代には国土庁の首都移転計画の策定を行っていたが、その時に私が提案したのは東京湾文化圏構想ということで、広域に文化を考え、その文化ベルトを考え直すということであった。
- ・ 愛知万博基本構想にも関わらせていただいた。環境問題がテーマだったが、環境問題だけではなく、Beyond the development ということを提案した。日本は地方の文化さえ壊すような開発をしてきており、開発して失敗して、それから考え直すことにこそ、今の日本の意味があるのではないかと考え、開発の後にということを、世界が今、これから問題にしなければいけないことをテーマにしようということで、提案したもの。
- ・ また災害というときに、心の復興ということに対し、芸術というものが一番効果をもたらすものだと信じており、それをテーマに阪神淡路震災復興、東北大震災震災復興に関わらせていただいた。
- ・ 私が活動のテーマとしている言葉は二つある。社会基盤としての芸術、先ほど申し上げたように、水道やガスのように、毎日の日常になくってはならない。それが芸術であり、そうならなくてはいけない。また、何よりも、その地域のコミュニティを形成する核となるようなものだと考えており、それを実現するため、まちづくりの基本方針として、地域の鍼灸療法ということをテーマとしている。
- ・ 地域全体を一挙に変えることは無理がある。例えば、総理大臣でも日本全体を一気に変えることは難しい。ただし、その地域ごとのポイントというものを探し、そこに変化を与える、刺激を与えることによって、その地域の持つものの大事さ、そしてこれから取

り入れることの必要性というものを語ることはできないのではないか。それが芸術というものの新しいあり方ではないかというふうに思っている。

- ・そういったことで、長年、都市の新しいトポスを作るということでは、様々に首都圏でも活動し、前記に加えてランドマークタワー、パリ日本文化会館、六本木ヒルズ、三菱1号館美術館、富山ガラス美術館、富山グランドプラザ等々、様々な拠点形成を行ってきた。また拠点形成のアイデアとしても、様々な構想を作ってきた。これは30何年前の計画、日本美術館構想、汐留跡地の構想だが、これらの中で様々な人材が若い時から仲間として一緒に取り組んでくれ、隈研吾や竹山聖、エドワード鈴木など、様々な建築家たちと一緒に活動してきた。前橋の再整備のためにメンバーとして関わったプランは40年ぐらい前から始めた構想であるが、空中歩道橋ということで地を上から見るということで、これは城郭などにも使えるアイデアかと思う。市内の空中庭園を造って様々な文化の発信をするということは、六本木ヒルズの時に活用した。富山市で実現したLRTは、これも40年ほど前から都市の速度を変えるという意味でやってきたもの。また、これは若い隈研吾が作ったものであるが、前橋駅の上を森が覆い、駅の上が自然公園になるというもので、当時では実現しなかったが、現在の環境の一体化ということで求められることに対しての早期の提案だったのではないかと思っている。
- ・また、これは私が手掛けたベネチアビエンナーレでデビューした千住博に書いてもらったものであり、前橋の駅前に熱帯雨林という異なった環境を作ることにより、環境に対して敏感であって欲しいということで、本人が自作で書いたもの。これは今芸大の美術学部長をやっている日比野克彦が、まちから出る廃品によってできる公園を作ってみないかということでプランを作った図である。このように若い皆が、その頃は実現するかどうかわからないものに取り組んでいた時期があった。情熱は全てを可能にすると思う。
- ・これは新しい和の形であり、山梨県という歴史の古いところにも示唆を求めていきたいと思うが、茶ということをテーマに、いわゆる守破離という言葉があるが、その過去を生かしながら未来を作っていくためにはどうしたらいいか。道具だけではなく、そしてその新しい過去の基盤としたものを新しくすることによって、また産業が、日本は文化ということが産業になっている国なので、地方において活性化する、その契機となるような茶の運動を様々に行ってきた。
- ・これはパリのユネスコ本部で行ったものであり、すべてのものを新しく作るが、すべてのものが過去に基づいているという、新しい和へのヒントということで、勅使河原宏さんや安藤忠雄さん、様々な方々に協力していただきながら、この実験を行う中で、日本というものがどういった考えを持っていて、形ではなく、思想、哲学であるからこそ更新できる、そしてそれは多くの場合、地方から発信されたものであるということを訴えてきた。
- ・この頃は、随分有名になった千住博くんが、ニューヨークのロックフェラー財団の壁面

全部を作ってくれ、非常に好評だった。ニューヨークのテロがあった頃で、中止をしようという話もあったが、当時のジュリアーニ市長からお手紙をいただき、このような多様性を認識できるような展覧会をぜひやってくれという中で、私たちは瓦礫のニューヨークの中で展覧会を準備し、実現した。

- ・これがコミッショナーを務めた第46回ベネチアビエンナーレであり、隈研吾と千住博を世界に出した展覧会と言われている。また、これが長崎県美術館であるが、その前には六本木ヒルズの美術館の準備をしており、現代美術館に特化した展覧会や美術館を準備するとともに、六本木ヒルズの再開発自体を手がけていたが、長年東京でやってきた中で、なかなか東京の未来を発想しにくくなった。そうした日本の未来と東京の未来が同期しなくなった中でたまたまお話があり、私の故郷でもある長崎県美術館を手がけることになった。
- ・長崎県美術館が着工する前から館長として準備していたが、当初はやはり同時期にオープンした金沢21世紀美術館のような啓蒙型の美術館、つまり海外の動向、もしくは東京の動向を地方に伝える美術館という考えがあったが、準備が遅れ、長崎に滞在している間に、長崎という地域性を深く考えるようになった。数百年の間日本の唯一の海外の窓口であり、また北部九州という意味では大陸との窓口でもあったので、そこからの文化摂取というものは大きな影響として今日本の文化基盤になっている。金沢の漆器や山梨のハンコもそうである。そのようなときに逆に地域にできる美術館は、地域が日本に何をなしえたか、何をなしうるのかということを考えていくべきだろうと考え、また、その地域のことにこそ責任を担う美術館でありたいということ考えた。そこで、美術館がどうしたら地域の起爆剤になり得るかということのためには、美術館というものがそもそもどういうことで存在しているかということを考えなければいけないというふうな考え、120枚ぐらいのシートを書き、関係者に徹底して、その方向性で実現した美術館となっている。
- ・まず美術館というのは、金庫と劇場だと定義した。金庫というのは、県立美術館であるから、県民の税金で購入された収蔵品というものがある。それは多くの場合美術品だが、その美術品をしっかりと保存管理するというのが一つの役割。またもう一つは、異なった変動性の金庫ということ。様々な時代によって、美術品の価値観は変わる、時代の価値観が変わってくる。そこで私たちそれを守るものとしては、その時代に合わせた価値発信をしていかなければいけない。ピカソの絵にしても、ピカソが生きていた時代と今の時代では価値設定が違う。様々な新たな情報をそこから読み取ることによって、その時代に合わせた価値の提案ができるものが長く残り、またその金庫を豊かにしてくれる。そしてそのためには、それを演出する劇場としての機能がなければいけないという考え方である。
- ・都市的役割の設定、教育資源の醸成、コンテンツバンクと様々な考え、また出会いの醸成ということで、これは地方、地域において出会いというものなかなか難しい時期で

あるが、いわゆる肩書きなどのすべてを外した人間と人間の出会いというものが、文化芸術の間では実現できるということ。またメディア性については長いので割愛させていただくが、お見せしておかないといけないのは、システムを考えながら私たちもただ単に作るだけではなく、まだあまり皆がやらないかもしれないが、こういったマーケティングシートを自分なりに作り、どうしたら地域で起爆剤となりうるかということを考えながら、美術館を作ったということである。

- ・そしてその中で、20年ぐらい前から私は言っているが、今文化庁にも取り入れられている、美術館が核となって社会活性化になるような社会構造を作っていけるということがある。いきたいではなくて、いける。いけるのにそれをやらないということは、機能停止していると言えないと思っている。おかげさまで長崎県美術館は、その前の美術館の時は3万5000人だったのが、開館と同時に年間100万人弱の動員となった。様々な、このような社会というものを、この美術館がどのほど意識しているかということをお話したからかと思っている。
- ・オープン後のあり方については、隈研吾の名作建築でもあるが、建物だけというよりも、人が入った方がはるかに環境がすばらしいというような仕掛けを相談しながら様々な作っていた。エントランスはエントランスでありながら劇場であったり、フリースペースであったり、様々な機能的に変化させながら多目的なものをつくる。そして20年前ではあるが、4メートル掛け7メートルのLEDビジョンをつくり、無償公開という事業を美術館は県民のためにあるということの実現のために行った。また幼児教育、感性教育事業を重視した。現在も母学ということで赤ちゃんのための芸術というものを強力に推進しており、AIスマート揺り籠を3月に発表することを考えているが、すべて芸術の為すことだと考えている。
- ・また、美術館だけでは足りない。もしくは美術館があるからこそ、市内全域、県内全域に波及する効果をイベントとして見せることも大事であり、活水大学という大学全体や商店街アーケードなど地域全体をメディア美術館化するというようなことを行った。
- ・ここから富山ガラス美術館となるが、7層ぶち抜きで、美術館と図書館が一緒になり、それぞれの階にステージがあるという、これも隈研吾と一緒に作ったものである。これはコンパクトシティがテーマの富山市において、コンパクトシティの中にコンパクトシティを作る、そしてその地域というもので伝えられるものを結集させる図書館と美術館をさらに結集させるということで、その機能を考えながらデザインをしていった。
- ・そして、まちの再生を色々やってきた中で、富山県高岡市の金屋町に関わった。金屋町は工業産業、鋳物産業の中心地であったものの、それが衰退して行って、再生させなければいけない。しかし可能性を感じたのは、この地域というのはもともと職人の町であって、職人の方々が、町は衰退していても産業が衰退してもそこに住み続けている、その生活があるということだった。この生活自体を、生きているリビングミュージアムとしてとらえて、そこに工芸を結集するという、工芸のふるさとづくりのようなことをや

ったらどうかと思い、またその中に懐かしむだけではなくて未来性を入れるため、その産業である鋳物から生まれたアルミ産業、マグネシウム産業から、隈研吾に展示什器を大量に作ってもらった。そこで全国から応募された3500点ほどの工芸作品を美術館のように展示し、しかもそれは人々が手に取ることができて、購入することもできるというようなものにした。また、それぞれの家の中も、その家の方々にお願いして、展示場として変えさせていただき、市民の方全員がそこに、自分たちの作業を再び認識するために参加してもらった。これは駐車場で作ったカフェだが、ここで毎日隈研吾君が、建築について五、六人の学生に話すというようなことも行い、屋台であったりお茶会であったり様々な仕掛けを創造していった。

- ・ もう一つは芸大に来てから手掛けている、芸大の技術を利用して、地方の技術と手を組みながら文化財のクローンを作るというもの。これは法隆寺から相談が持ち込まれ、法隆寺の釈迦三尊像がなかなか見る機会が無いので、見せるように作って欲しいということで、100%に近いものを作ろうという取り組みである。そしてその作製にあたり、地方に根づいている、しかし今消えかかっている工芸産業と芸大の技術が結びつき合うことによって、同時に活性化することができるのではないかということで釈迦三尊像のクローンの作製が実現した。
- ・ これまで様々な地域と地域を結ぶイベントを行ってきており、私の事務所と研究室両方を含めて今やっていること、震災の復興やAIスマートゆりかごのようなバリアフリーの実験、地方創生とIoTなど、それらすべてが芸術的ニーズだというふうに私は理解している。芸術というのは、人のためになること、人の未来を考えること、そしてそのコミュニティの核となることだと思っている。
- ・ 最後に、コロナということが特に今日のテーマであるため、関係した取り組みを短くご紹介したい。これは、コロナの時代に夢を見られるかということで行っている事業で、私たちの優秀な学生たちがコロナで外に出ることができず、今最も芸大で流行っている職業は無職である。弾く場所がない、演じる場所がない、描く場所がない。ぜひ山梨県にそういう場所、もしくはレジデンスも作っていただきたいと思うが、しかしそういうときだからこそ、世界中の自分たちが弾きたいと思うような場所に飛んで行って、演奏ができる夢を実現させてもらうために、様々な企業の力を借りて、バーチャルでその土地に飛んでいくということを配信している。また、ソーシャルディスタンスを形にした、デザインとして生かしたイベントを、毎年丸の内地域全域で開催している「藝大アーツイン丸の内」で行った。このグリッドが2メートルずつになっており、そこには1人しか座れないが、それ自体が舞台と混交することによって、全員が参加するようなイベントにするということで行っている。昨年度グッドデザイン賞をいただいた。NTT都市開発と行った大手町アトラボラトリーズも物理的な場所が通信を通じて世界とインタラクティブな広大な空間を作り出すという実験的な事業だった。
- ・ 時間もないので、まとまりのない話で本当に恐縮至極ではあるが、少しでも皆さんの役

に立てればというふうに思う。どうもありがとうございました。

[意見交換]

田坂顧問

- ・伊東先生ありがとうございました。20分という時間設定ではなく、3時間ほどじっくり話を伺いたいと思った。可能であれば、先ほどの資料は、本当に叡智の山のような資料なので、1枚1枚しっかりと読ませていただきたい。
- ・感想とともに、質問をさせていただきたい。まず、「地域の鍼灸療法」という発想は、さすがと思う。地域活性化を考えると、すべてを一度にやれるわけではない。ビジネスも社会システムも、自然に「生態系」と呼ぶべきものが生まれてくるが、この「生態系」には、必ずある種の「ツボ」のようなものが存在する。臨床心理学の河合隼雄先生の言葉を借りれば、「重心」のようなものが生まれてくる。限られた資源でも、その「ツボ」や「重心」を突けば、全体が活性化するという事を見事にやっていると思う。
- ・二つ質問をさせていただければと思うが、まず一点、この「ツボ」を一つの地域でどのようにして見出すのか聞かせていただきたい。今後、私の住む河口湖周辺や、山梨県全体で、その「ツボ」というものを発見していく参考にさせていただきたい。
- ・二点目として、先ほどの「アートワクチン」の考えもさすがと感じる。これについて、もう少し詳しく伺いたい。「すべての逆境は、進化の好機であり、レボリューションのチャンスだ」ということを、先日、あるテレビ番組で申し上げた。この捉え方をしない限り、この時代を乗り越えていくことはできない。先生はまさに、その「アートワクチン」という考え方を、後ろ向きに、こんな制約があるからこうするしかないという発想ではなく、極めて前向きに捉えられているかと思う。おそらく、この時代を乗り越えたあと、先生のお仕事を通じて、アートの進化が起こるだろうと考えるが、そのレボリューションのビジョンを伺いたい。

伊東特任教授

- ・鍼灸療法ということは、金屋町楽市をやっていた頃に具体的なイメージとして持った。東京での経験が非常に多く、例えばスパイラルなど、そういった点を作ることによって広がっていくという認識はあったが、東京の場合はすべてが同時に活性化していくので、あまり顕著にならない。
- ・特に長崎の美術館については、地方に移って、そこの人達と話し合いながら作っていった美術館と言っても過言ではなく、地方の人たちから影響を受けながら考えていったものだと考えているが、その時に、地域から失くなったものが多いということを感じた。
- ・例えば長崎はヨーロッパ文明が早期に到来し、カトリックや鉄道、写真など様々なものがあつた。そういった意味で美術館が、新しいものを紹介するだけでなく、地域から失

なくなったものを指摘する、そこにあったけれど今はないというものを指摘する一種の刺激措置になったらどうか、そうすることによって人々のイメージから消去されたものが回復すれば、このまちは回復するのではないかと考えた。実際に、隈研吾とロビーをコンサート会場、700人のコンサート会場にできるような階段の向き方にするなど、いろんな仕掛けをする中で、第一に、都市から消えたものを回復する、それは都市の中ではできないが、施設の中でやるということをテーマとした。

- ・また、それもできないところはどうかというところで、金屋町楽市の話になるが、富山大学で文化マネジメントコースを作るという話があり、文化マネジメントは実際に作らなければいけないフィールドだと思っていたので、指導する役割で高岡に来たところ、高岡が非常に鋳物産業が落ち込んでいる時期だった。
- ・しかし、鋳物の職員の残存率というのは、各地域の職人が減っている割合に対しては非常に多く残っている。そこで、この職人の人たちをどういうふうにもう一つは、その職人が同じ地域の中で、そこに工場がなくても住み続けて、季節の催し事をずっと400年続けてらっしゃること自体が示唆することは非常に大きい。なぜならば、日本の工芸産業が落ち込んでいるというのは、工芸産業が落ち込んでいるわけではない。その工芸技術はまだ残っているのに、落ち込んだり消滅したりと言うのは非常に失礼ではないかと考えた。
- ・生活が変わって、生活の価値感というものが変化してしまう。日本人の生活というものが、少しでも良いものを求める。そして日常的な、例えば箸というような、どれにでも交換可能なようなものにでも、魂を込めて作るようなものを評価しなくなってしまった。用の美というのは、使えるからいいとか、使いやすいからいいということではなく、その美が生活の中にあるから、私たちが毎日元気で生きていけるという心の用を満たすものである。そういうものをつくり出すことがいかに素晴らしいかということ、そしてそれを日本の地方が作っているということを知らしめたかった。そうすると、高岡の広域、富山県全域で出来るものではなく、鍼灸療法ということで金屋町にスポットを当てて、金屋町全域を美術館にするという構想となった。
- ・そこで、どこが点となるかということについて、産業性や経済性ということもあるが、東北でも同じことをやっており、震災前の風景、80年間にわたって地元の人が記録したものを、泥に塗れているものもあるが、それを収集してアーカイブ化している。なぜならば、現地の人たちにとっては災害が思い出ではない。それまで続いていた生活自体が、クリエイティブであって、未来を見させるもの。部外者は災害を見てしまうが、東北の財産は災害ではなく、東北が数千年にわたって打ち立ててきた地域文化である。しかしそれが例えば、鍛冶屋さんの隣にそば屋さんがあったというようなこともわからなくなったら、まちもつukれないというふうにも考えた。そこで誰も手掛けないので、アーカイブを作り、うちの学生たちに、そのアーカイブから想定される未来を芸術家の予知能力を使って、絵であったり音楽であったりにしてもらっている。その中でも、やはり

祭りや宴会、結婚式など、そういったことがいかに大事なことを示唆しているかということをおぼえてはいけぬ。点は、やはりコミュニティが何によって支えられているのか、そしてそこで残っているものがあるのか、様々なものを考えながら決めていくものだというふうにおぼえている。

- ・二つ目の質問のワクチンであるが、一昨日の先生のテレビでのお話を聞き、たいへん感銘を受けたところであり、今回お会いすることができ幸せに思う。ワクチンは先生がおっしゃったように、パンデミックは過去に多くあった。例えば代表的な例では、ルネッサンス期のペストがある。これはルネッサンスの時期の早期に、メディチ家の人達も罹ったものである。また1910年代には、様々なパンデミックがあった。パンデミックではないが、大恐慌というものも1930年代に起こった。世界の人々が受ける悲劇、第一次世界大戦、第二次世界大戦というものもある。しかし、人間というのはそれを、ネガティブなものからポジティブなエネルギーに変えていきながら、歴史を紡いできた。
- ・そして例えばルネッサンスの頃には、ある意味ステイホームの中で、ルネッサンスまでの時代の見直しが起こり、ギリシャ時代のアリストテレスやソクラテス、プラトンのキリスト教的ではない考え方が再生され、そこで、今の科学技術や芸術というものの基礎がつけられることとなった。1910年代のインフルエンザでも当然多くの死者が出たが、それが哲学的な思考というものに大きく影響を及ぼし、それからの、例えば新しい知の体系や哲学的体系、芸術的様式の変化などを生み出してきた。
- ・心が丈夫なら、体は死んでも、ものが残るといふふうに思っている。死というものすべての恐怖を生み出すわけであるが、死というものを生きているうちに乗り越えることも出来るとおぼえている。芸術は今、非常に危ない時期にかかってきており、自分たちが自分たちをネガティブにするような思考が横行していたりもするが、このような、すべての怖さが先に立つ時代にこそ、芸術の存在が重要である。
- ・芸術は、常にミケランジェロしても、葛飾北斎にしても、すべて生きる喜びを表現している。そしてそれは芸術家だけでつくり出したものではなく、一般の人たちが強い心を持つためには、例えば病に打ち勝つベアトリーベンや、死の恐怖を受けながら絵を描き続けたミケランジェロなど、例証が必要になってくる。そういったものを、バーチャルな環境でも、リアルな環境でも起こすことによって、多くの人たちは死という恐怖、パンデミックという恐怖を乗り越える心を持つのではないかとおぼえている。
- ・ワクチンがいつ来るかわからないという中で、なるべく早く来て欲しいが、そこまで思考停止をしてはいけぬということがワクチンの一番大きなテーマである。そしてそのワクチンを打つこと、つまり様々な芸術に触れることによって、思考が、想像力というもの、実際の移動の何百倍も、大きな自分に対して影響をもたらすことがわかるのではないかとおぼえている。

田坂顧問

- ・ 知事をはじめ行政の方々には、伊東先生のこの深い見識を、ぜひ参考していただきたいと思う。
- ・ 「ツボ」ということに対して、失くなったものが多いということから話を始められている。たまたま、東京の「スパイラル」という施設のことをおっしゃったが、私は弁証法に関する本を過去に何冊か書いている。すべての物事の進歩や進化というものは、弁証法的に起こる、言葉を換えれば「スパイラル・アップ」、まさに螺旋階段を登るようにして起こる。それは、すなわち、「古く懐かしいものが、新たな価値を伴って復活してくる」ということである。
- ・ まさに伊東先生がおっしゃっている、「失くなったものを復活させる」ということは、単に復興のことだけではなく、そこに現代的な、新たなものが加わって来ることが、「進化」の一つの方向なのだろうと思う。その意味では、バーチャルの環境ということも、付け加わるべき新たな価値ではないかと思う。
- ・ 先ほどの伊東先生のお答えだけでも、私の中では、非常に大きな想像力が働いた。ぜひ行政の方で、本日の講演を単なる教養講座に終わらせることなく、具体的な地域活性化の政策として、考えていただきたい。
- ・ 山梨県、そして富士五湖地域には素晴らしい古いものがある、その中でも、すでに失くなったものがあり、これを復活させることが、一つの起爆剤、「ツボ」になるかと思う。しかし、そのとき、「バーチャル」「IoT」といったものを上手く絡めることが出来れば、素晴らしい何かが生まれ、アートや文化の進化が起こるのではないかと思う。本日の伊東先生の素晴らしい講演に、改めてお礼を申し上げますとともに、ぜひ、知事に、行政に生かしていただければと思う。

長崎知事

- ・ 伊東先生ありがとうございました。また田坂先生からもご示唆をいただき、古くて懐かしいものが新たな価値を持ってよみがえってくるということで、まだ咀嚼中ではあるが、例えば、塩山という地域に古民家の集落があり、その古民家の集落を復活させて、多くの方をお招きするような場所にできないだろうかと考えている。地元の方は何も無いと言うものの、建物自体が一つの資源であり、ライフスタイル自体もそのままではまだ泥が被っている感じではあるが、それをうまく磨いて新しい光を当てることが出来れば、金屋町までにはいかないまでも、山梨の山間部の農村の良さをもっと表現できるのではないかと、もっと魅力的にできるのではないかと考えた。
- ・ またアートが、生きる喜びというものをそもそも表現するものであり、これで死の恐怖を乗り越えるというお話があったが、今私たちにとって、青木ヶ原の樹海というものが一つ大きなテーマになっている。ご承知のように昭和30年代から小説の舞台としてどうしても自殺のイメージがついてしまっているが、本来は溶岩流を乗り越えて芽吹いた

命そのものであり、そこに何がしかの表現をして、まさに山梨でアートワクチンをつくれないうだろうか。先ほどコロナの時代で夢を見られるかという伊東先生のお話の中で、場所が無いというお話もあったが、バーチャルではなく、例えばリアルな場所として、青木ヶ原がそういった芸術家の卵の皆さんと連携しながら生きる喜びを創出する場所になったら良いと考えた。

- ・断片的な感想で申し訳ないが、咀嚼を続けていきたい。ありがとうございます。

伊東特任教授

- ・先ほど田坂先生が言われた、古いものが古いままではなく、新しい価値を持ちながら再生していくということは本当に大事なことで、それが逆に文化や芸術においては、その価値を決定するのだろうと思う。
- ・つまり、普遍的な価値というものはその時代その時代において翻訳されて新しくなることができるので、まちの鍼灸療法もそのような文化、素材というものを確かに考えてやっていくべきと考える。
- ・今知事が言われたような、リアルということも非常に大事。山梨の様々な歴史の中で、やはり自然というものは大きな要素を持っていて、共生してきた歴史というものがリアルに今も続いている。この委員会のコンセプトを読んで非常に素晴らしいなと思ったのは、デュアルモードという社会を想定していること。それはリニアによって実現するものなのだろうが、そのデュアルモードというのはバーチャルとリアルなのかもしれないし、その位置移動の関係なのかもしれない。人間は逆に一つの環境の中ですべてのものを終始させるのかという問いかけ、これからも特に強くなる問いかけに対して、提案されているということに対して非常に感銘を受けた。

藤沢委員

- ・伊東先生、ありがとうございました。インスパイアを非常に受け、もっと聞きたいと強く思った。
- ・田坂さんが指摘されたツボの話と螺旋階段、アウフヘーベンの話は、いろんな思考の時に使わせていただいているので、改めてそうだなと思って聞いていたが、その時に、古く懐かしいものが新しい価値を伴って現れるという点について、もう少し具体的に伺いたい。
- ・地域の核として美術館が地域創生にというと、新しい美術館を作るイメージがどうしても出てきてしまう。しかし金屋町のお話は、すでにあるものが、実はツボの可能性、潜在性を持つ中で、新しいものを作らなくても、それをいかに顕在化させて、社会、地域創生のために使っていくかというお話であったと思う。そのツボというものは、言葉を変えれば失くなったものであり、その普遍的価値を上手く新しい価値感と重ね合わせることで顕在化させる。それには非常に共感する一方で、この普遍的価値というものをど

うやってみ出していくかという手法について、もう少し伺いたい。

- ・例えば、先ほどの昔の民家のお話で、知事もお考えかと思うが、そのままハードで復活させても仕方がない。そこで、その価値というものをどのように見出してこられるのか。歴史なのか、それが時代時代で持っていた機能を分析することなのか、役割を分析することなのか、その時の人の気持ちを分析することなのかなど、その価値というものをどのように浮上させるのか、そういったことを伺えればと思う。
- ・もう一つ、私もフランスの文化政策をずっと調べており、まさにミッテラン政権の時代は、パブリックアートを世界に新しく伝えた時代だと思っている。パブリックアートの時代は、芸術家が作ったものがまちの中であって、それを市民、国民が見ることでインスパイアされていく時代だったが、先生がおっしゃったものは大幅にパブリックアートの時代を終えて、皆が参加して、未来を作っていくアートということで、ソーシャルエボリューションアートとでもいうような、パブリックアートの次の言葉が必要となるような気がしている。その言葉のヒントとして、山梨県が新しい、パブリックアートの時代は終えて、丸々アートの時代を創造するというような言葉が出てきたら非常に素敵だと思い、もしそういったワーディングがあれば伺いたい。

伊東特任教授

- ・最初のご質問の美術館の問題について、まず美術館は、今も富山の名誉館長をやっているが、今まで10個ぐらいつくってきており、様々な実験をしてきている。紹介しなかっただけでも、例えば美術館を分棟型にして集散的に美術館をつくり、美術館の形態にアーティストが左右されないようにする、自然と連結して作るなどいろいろしてきたところだが、その美術館というのが、長崎県美術館をつくりながらもではあるが、やはり少し物理的すぎると考えていた。
- ・それは、美術館に来ないとその情報が受けられないというのは、県立美術館としては不完全なのではないかということ。県民のために貢献として作られるべき美術館なのに、美術館に行かなければいけない、20年ぐらい前に考えたことであり、まだバーチャルリアリティが実現していなかった中で、移動美術館ということ考えた。
- ・長崎は島が多く、物理的に来られない人達が多い。そこで、造語だがカルチュラルディバイドを起こすような美術館であってはいけないと考えた。デジタルディバイドという言葉があるが、カルチュラルディバイドはもっと大きい。例えば美術館に来ないと、文化的な情報や文化的な技術を享受できないとすれば、それは逆に閉じこもった閉鎖的価値に陥るしかない。先ほどの資料ではあまり詳しくは見せることが出来なかったが、各地域に、いわゆる美術の友の会のようなものを作って、各地域のボランティアの人たちが美術館の情報発信をする。もしくはその移動美術館によって、そこにやってきた学芸員たちがトラックや船で、アートムービングということで、引っ越し屋さんのようなことを行った。そのとき、ピカソなどを持っていっても本当にいいんですかといった話を

されたが、美術品は100%修復することもできる、しかしそれを見た、見ないという差は修復できないため、例えば公民館であろうと持っていくべきだというのが私の思想であった。そして、美術館という建物が美術館なのではなく、地域自体が美術館だということを訴えていった。

- ・長崎はある程度コンパクトなシティであったためそれが受け入れられたが、富山で考えたのは、学生たちの教育ということもあり、市民と協働したいいわゆる仮想美術館ということ。金屋町という舞台が3日間だけ美術館になる。そのために市民が駐車場も開放してくれて、通日も車を閉鎖してということ全体を理解してもらうために、個々の家を回ったりしていきながら、仮想美術館を作るための活動をしていった。そういうことが本当は美術館ではないかと思う。美術館という建物ではなく、美術館という活動があれば、どこでも美術館はできるのではないかと思っている。
- ・また、もう一つのご質問について、フランスのジャック・ラングに3年前に大学に来てもらい、若い人達に講義してもらったが、そのときに言っていたのは、パブリックアートという具体的なものではなくて、例えばナンシーの演劇祭といったパブリックイベントというようなもの、市民が支え合う一種の新しい祭りのようなものを、新しい衣を纏ってできるか。そしてそれを支えるような美術館、文化施設に変化していかなければいけないのではないかということだった。
- ・長崎のときに言っていたことで、富山でもそうだが、文化施設同士が断絶的になっていて、それがネットワークされると、大きな効果を得ることができる。一つの例えば美術館が成功したからといってそれでいいわけではなく、地域が成功するためには、様々な施設、一つを回ったら全部が回るような回遊的なものができる状態が一番成功なのではないかと思う。
- ・山梨県のように非常に個性のある美術館があって、個性のある地域があって、そして何より大きな自然があって、産物があって、豊かだとみんなが思う。田坂先生のお話を聞いて思い出したことだが、ここにあってここにはないというのは、過去、西洋でも言われた言葉があって、それはユートピアという言葉。ユーというのは失くなったということ、トピアは場所。ここにあってここにはないというのは、ここにあったということ。ユートピアは無いものをねだっているわけではなく、その言葉は非常に大きく誤解されているが、正しいというふうに思っている言葉の一つである。
- ・新しいワードとしては、富山では富山で休もうということがあって、デュアルモードの時のキーワードはいくらでもできるのではないかと思う。山梨は先日あずさ19号で行ったが、本当にずっと見られるような景色で、デュアルモードと言われると何となく本当にデュアルモードになるのではないかと思えた。それをみんなで言語化して、地域の人たちの言葉の中にヒントがあるのではないかと思うが。また何かご提案できるようなことを考えたら、ご提案させていただきたい。

東座長

- ・伊東先生がおっしゃっていた、都市の速度を変えるということは非常に重要だと思っている。私も良く地方を回るが、圧倒的に東京、もしくは関東の首都圏と関西圏、その速度と地方の速度が違いすぎる。
- ・実際に何が起きているかというところ、そこから移動した人々が、地方の時間に適合することに結構苦労されており、それが移住の障壁になってきているということも一定程度出てきている。
- ・その時に、先生がアートを中心にコミュニティを作られているが、実際に東京でもアートコミュニティとテクノロジーコミュニティが混じってきている。やはり技術者のエンジニアの方々と、職人的なギルド、アートのコミュニティが上手く連携しながら今後のニューノーマルをどう作るか、若い世代のアーティストや、もう少し上の世代も協力しながらコミュニティを作るということで、私も参画しているところ。
- ・特にミュージシャンの方々はその感覚が研ぎ澄まされており、例えば水素エネルギーでライブを行うといったことも出てきている。やはりテクノロジーの目指す先はSDGsだということで、これはアートも同じである。そのコンテキストが脈々と続くという世界が、徐々に合流してきているのではないかと。音楽に関して、これだけ世界中で、サービスの分断、貧富の差などが起こってきているなかで、激しい音ではなく、よりナチュラルな音に切り替えようという動きがトップティアのミュージシャンの方々の中で起こってきている。
- ・非常にそこが融合しだしたというのが今の時代だが、コミュニティを作っていく、新しい山梨のなかで丸ごとアート拠点にしていく、アートの山梨だということを目指していくときに、単純にメッセージングとしてアートや芸術だけではなくて、やはりその先の未来をどうやって作っていくか、先生のおっしゃる言葉で言うと、アーカイブから想定される未来、そこをどう一緒に作るかというところのチームアップなど、コミュニティづくりについて先生のお考えなどをお聞かせいただきたい。

伊東特任教授

- ・山梨はスタジオなどが多く、ミュージシャンにとっては本当に馴染みのあるところであり、これからリモートになって、より配信やクリエイションの制作をすることが非常に楽しくなるようなところではないかというふうに思っている。
- ・また今大河ドラマでは、武田信玄が移動する、それだけでも織田信長に恐怖を与える。そういった富と武力というものを想定させるような、何か力を感じさせるところもある。そういう意味で新しいトピアづくりというのは、今度リニアが生まれるということで、それは東京から経由されるということだと思うが、昔北陸新幹線のパネルに呼ばれた時に、とんでもないことを言ってびっくりされたことがある。
- ・瞬間観光というものを考えたほうが良いということで、瞬間観光とは何かかというところ、

駅に滞在している時間が二分間であれば、その二分間でどれだけ多くその土地の魅力を注入できるかということを考えることであり、それによって、その人がその時に来るのではなく、戻ってくるのではないかということ。またいかにその魅力を伝えるかということで、この前の甲府城の検討会でも申し上げたことであるが、甲府城の石垣のなかに城壁が繋がりに、今でも美しく存在して、それだけが存在しているように見えるが、実は多くの建物が中にある。それが繋がっているわけではなく、城壁は素晴らしく美しい。そうすると、その動線が一番大事になるのではないかということをお願いした。

- ・また、山梨の中での文化の動線計画というものも考えるべきではないか。湖などはまだ利用がされておらず、この美しい景観がもっと利用されてしかるべきかと思う。
- ・別の話になるが、先日チームラボの猪子君と久しぶりに会ったが、佐賀県の武雄市の山の中でアートの展示会をやっているということだった。そこで、サウナがアートだということで、過激に暑いところから過激に寒いところに突っ込んでいく、それを繰り返すことになれば、人間頭のなかの判断基準が無くなり、ハイになるしかない。自然の中でハイになるというものすごい状態こそがアートではないかということで、裸で入れるサウナを作ったと話しており、ぜひ行きたいと思っている。そういった感覚的なアートを体験する場所というのが、山梨ならできる。本当に美しいものを美しいように切り取るような場所などもできる。
- ・先ほどの金屋町で一番美しいと思ったのは、金屋町の千本格子の町並みだけではなく、その生活であり、今現在、エコであることなどを見通した生活を400年続けているということであった。そこで、逆にそこに未来があるということを証明するために、そこで生産される未来的なデザインの什器ということにこだわって、隈研吾くんが1キロ続く什器を地元生産のアルミニウムを使って作ってもらった。
- ・私も愛用している印伝など、山梨にもいろんな工芸品がある。そういうものの未来を使って先端産業に参入するような、そういったこともできると考える。歴史が古い地区だからこそ、そして独自の、それこそある種の自治体、ポリティカルエリア、何百年というふうな大事にしていた地域だからこそできることがあって、その見直し、現在の時代から照らし合わせた検証というものが必要なのではないか。

清水委員

- ・伊東先生どうもありがとうございました。
- ・非常に面白い話で、私のビジネスの方にも使わせていただきたいワードがいくつかあるので、お許しいただければと思います。
- ・命題のやまなし自然首都圏構想研究会としての考え方について、これは知事並びに事務局の方にぜひお願いをしたいが、山梨という地域にいかなるコミュニティを作って山梨を発展させるかということを考えていただきたい。そのための一つの形として、自然首都圏構想研究会があると思っている。

- ・山梨の良さがわかるのは、山梨の地元の人、実際に住んでいる人だと思う。その方々に、地元の良さや失ったものを一度挙げてもらう必要があるのではないかと。都会に住んでいる我々だけでなく、気づいていなかった人、東京や首都圏、世界から来てもらう人たちに何を喜んでもらえるのかというアイデアは、我々も当事者として出せると思うが、本当の山梨の良さ、素晴らしさというものは、実際に住んでいる人へ聞かないといけな。旅人が良かったと思う部分も当然あるとは思いますが、実際に住んでいる人から、それを挙げてもらう。
- ・そうすると、箱物にこだわらなくて済むと思っている。先ほど伊東先生もおっしゃっていたが、美術館を作ることが目的ではなく、山梨の良さを皆さんに知ってもらうことが今回のテーマ。山梨県立美術館だけでなく、富士吉田市にまた美術館を作るというよりは、そのエリアがどんなエリアで、どんな良さがあるのかということをもう1回整理して、みんなでそこにアイデアを出し合う。伊東先生からもいろんなアイデアいただいたり、田坂先生や藤沢先生、住まわれている方々にアイデアをいただいたりということをやっていく。それを早く一度まとめてみて、そのたたき台についてどうするかということをやっていくのが、ワーケーションの基地を作るにしても、何をするにしてもいいと思っている。具体的にいろいろ出していくなかで、議論し合って、こだわらずにいろんなものを作っていく。早くやらないと、静岡や長野がやってしまったら、山梨でやっても追いつかないので、ぜひそれをお願いしたい。

伊東特任教授

- ・住む人の力というものを非常に大きく感じたのは、長崎県美術館をつくっているときの学芸員の雇用についてだった。学歴や試験、文化庁の指定などいろいろあり、その県の人ではない人々を雇うしかないときもあるが、囑託で雇用したその地元の人たちの力が大きな力を発揮することで、美術館ができた。
- ・住むということと、そこに対する愛着という以上のものはなく、またそれ自体が稼働することによって、未来を支えていくということを感じた。日本のそういった地域に対する愛着が長い年月のなかで生まれてきて、それを踏まえた取り組みを行っていくことが一番だと思う。
- ・富山に行った理由も、日本のいろんなところでいろんなことを試してみたいということであった。金屋町楽市を企画したのも、人の力というものをどうしたら引き出せるか、それは例えば美術館というガワを作ることではないと思ったからである。

長崎知事

- ・咀嚼の途中であり大変恐縮だが、まずは今あるもの、それは人の生活もしかり自然環境もしかりだと思うが、それに対する愛着から想定する、これからの姿を生み出すということを考えていきたいと思う。

- ・その取っかかりは県民の皆さんの地域に対する愛着だと思うが、具体的にどうやって引き出せるかについても考えていきたい。

[以下、時間の都合により会議後終了後に聞き取った御意見]

中村委員

- ・芸術・美術は心の豊かさに必要不可欠であり、社会基盤としての芸術、コミュニティ作りのベースだと強く感じている。地方創世の観点からも芸術の活かす活動が一層強く求められていると考える。
- ・伊東教授が手掛けた文化・芸術の事例紹介の中で感じた地域の良さをより活かしていく取り組みについて山梨県としても意識いただけたらと思う。
- ・既にミレーの美術館として有名な県立美術館や平山郁夫先生のシルクロード美術館など多数の施設をお持ちだが、山梨県の特徴が表現されているのか、もしくは複数の施設をつなぐことによる相乗効果による特徴づけなど、工夫の余地があるのではないか。
- ・文化、芸術に関して〇〇な特徴を持つ山梨県！と多くの人々が認識することで、より品位の高い街になると思う。

野村委員

- ・伊東先生のお話に変感銘を受けたが、とりわけ地方工芸にしろ美術館にしろ、地域にいる人材が生き生きと活動する場を作ることの重要性を再認識した。これまでこの研究会は、東京の就労世代などをいかに呼び込むか、彼らにとって何が魅力的かという受け身のところがあつたが、実際には伊東先生がお話した「ユートピア」（なくなった場所）という概念が示唆するように、（いずれはなくなってしまふかもしれない）今すでに地域に存在する人材の活躍こそがカギであることがわかつた。
- ・工芸や美術館などのタネの下に学術や研究、教育が根付き、それが地域住民と結びついていくことが示されたが、先程来のお話のように山梨県にはワイナリーや古民家、美術、音楽などたくさんのタネがあると思う。行政はそれらをどう生かし、有機的に結びつく動線を作るかが問われていると思う。もちろん、それらが実現すれば、外部の人を引きつける力になる。

以上